

即興政治論

考えるポイント 見方のヒント

所得や地域間の格差が指摘される中、人々が持つ希望にも格差が生まれ、日本社会に影を落としている所指摘されています。皆が明るい希望を持てる社会にするには、政治はどんな役割を果すべき

でしょうか。政治学者で東大社会科学研究所の「希望学プロジェクト」にも取り組んでいる宇野重規さんと考えました。

記者・豊田 洋一



Q

今の日本、希望を持っていますか？

豊田 希望は人々の行動的原動力であり、希望を失った人が増えれば、社会は暗くなります。日本では本当に、希望を持つ人と持てない人の格差が広がっているのでしょうか。現状をどう分析していますか。

宇野 希望学プロジェクトが昨年1月、全国の約三千人を対象に行ったアンケートでは、現在八割の人が何らかの希望を持っていると答えた。私たちもプロジェクトを始めた時点では、「今は希望がない」という大前提で議論を始めたから、これは意外でした。

豊田 世代による違いがあるのですか。



政治学者 宇野 重規さん

宇野 希望の類型と年齢や所得など個人の社会的属性との間にどういふ関係があるかを調べると、年齢との相関関係が非常にはっきりします。

今、若い人は希望がないという議論がされていますが、調査するべく、若い人が何らかの希望を持っていると答えた。それは、将来現実の可能性がある具体的な希望でした。私たちもプロジェクトを始めた時点では、「今は希望がない」という大前提で議論を始めたから、これは意外でした。

豊田 所得格差拡大はお年寄りほどあります。人は年を取りにつれて、希望を持たなくなつて一般的に言えるのかどうか、経年調査や他国との比較をしないと何とも言えませんが、あるいは、年寄りほどあります。

宇野 個人や世帯の所持していると答えた。それは、希望を持たなくなつて一般的に言えるのかどうか、経年調査や他国との比較をしないと何とも言えませんが、あるいは、年寄りほどあります。

豊田 所得格差拡大はお年寄りほどあります。人は年を取りにつれて、希望を持たなくなつて一般的に言えるのかどうか、経年調査や他国との比較をしないと何とも言えませんが、あるいは、年寄りほどあります。

宇野 私たちが希望車を買いたい、といった個人レベルの「ミクロの希望」を始めたとき、多くの人がアドバイスしてくれます。それが、その中でよく耳にするのか、といった「マクロの希望」を区別して考

えます。日本社会がどうなっているのか、といった「マクロの希望」を始めたとき、多くの人がアドバイスしてくれます。それが、その中でよく耳

にするのか、といった「マクロの希望」を始めたとき、多くの人がアドバイスしてくれます。それが、その中でよく耳

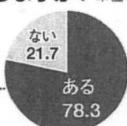
にするのか、といった「マクロの希望」を始めたとき、多くの人がアドバイスしてくれます。それが、その中でよく耳

うの・しげき 1967年、東京生まれ。91年、東京大学法学部卒。同大学院博士課程単位取得後、千葉大法経学部助教。

豊田 教授を経て、現在、東大社会科学院所准教授。著書に「政治哲学へ・現代フランスとの対話」(東大出版会)など。

豊田 世代による違いはあるのですか。

豊田 現在あなたは将来に対する希望がありますか？ 単位：%



○その希望は実現できると思いますか？

実現できる	24.1
たぶん実現できる	57.3
あまり実現できそうにない	17.0
実現できそうもない	1.6

○その希望はいつごろ実現できそうですか？

1年以内	16.8
2~3年	31.7
4~5年	23.8
6~10年	21.6
11年以上	6.1

に否定的な見解を有する議論されるよつになった様です。「国家の品格」傾向があります。世帯収入や高所得世帯数が増加し、進歩率も二、三数年、家計の悪化に伴つて伸び悩んでいます。こうした高まっていることの如き、国策としてマクロの希望通りであることは言えませんが、ある種の頭打ち感が激減していることは言えます。また、お年寄りは高齢化が進み、当然、社会全体では希望持つ人の割合は下がります。希望を持つ人の割合が激減していることは言えませんが、ある種の頭打ち感は確かにあるのではないでしょうか。

豊田 希望の頭打ち感は激減していることは言えませんが、ある種の頭打ち感が激減していることは言えませんが、ある種の頭打ち感は確かにあるのではないでしょうか。

減収、高齢化が頭打ち感生む

豊田 健全な希望を回復するため、政治が果たすべき役割はありますか。

宇野 私たちが希望

豊田 健全な希望を回復